朝河貫一賞　国際理解 論文

知ることが第一歩

福島市立信陵中学校 ３年　 遠藤　理恵

　目の前の大スクリーンにサッカーの試合の模様が実況されている。昨年の６月。日韓共同開催ワールドカップの開催中だった。日本が出場する試合の時間となると、私の所属していた吹奏楽部までも、部活動を中断して試合観戦をするほどの興奮だった。この大会は、日韓共同開催ということで、開催前から大きな話題となっていた。しかし、私は、日本の隣国である韓国が共同で開催するのは自然な成り行き、と単純に思っていた。なにしろ韓国は、同じアジアの国であり、日本と民族的にも、地理的にも最も近い国だからだ。

　ところが、今年になって学校で韓国と日本の過去についての勉強が始まった。そこで初めて、私は２つの国の間に様々な不幸な出来事があったことを知った。たとえば、「創氏改名」だ。韓国で生まれ、韓国で育ってきた人に、一方的に日本人と同じ名前での生活を強いたのだという。とんでもないことだ。しかし、今、もし私が「名前を韓国式にしなさい」と言われたらとしても、そのような体験をしたことのない私には、現実味がないのだ。当時の韓国の人々の苦痛を感じることはできない。また、今の自分たちには、とうてい関係のないことだと実のところは思ってしまうのだ。

　そんな私の考えを変えるきっかけとなる出会いがあった。それは、ちょん・ひょんしるさんという韓国の方との出会いだった。彼女は、私の母が今年の４月から始めた韓国語講座の講師だった。飛び入りで参加した私を温かく迎えてくださった。講座はとても楽しく、あっという間の２時間だった。韓国語の勉強の合間の話で、私が今まで全く知らなかった韓国の風習や事情についても知ることができた。家に帰ると、私は習ったことを得意になって父に教えた。「やっぱり、日本と韓国は友好的だよね。」と私は特に何も考えずに言った。すると、父からは私が想像もしていなかった答えが返ってきたのだ。「何を言っているんだい。日本は戦時中に朝鮮にたくさんひどいことをしてきたんだ。被害を受けてきた朝鮮では今でもみっちり日本による侵略時代の歴史を勉強しているんだよ。民族意識が強い国でもあるし、日本に対する敵対心はそう簡単には消えていないんだ。」その言葉で私はハッとした。学校の歴史の授業で習ったことが改めて思い出されてきた。

父の言葉が気になり、私は韓国の学校ではどのように日本を学んでいるのかを知りたくなった。考えた末、県立図書館へ行き、韓国の小・中学校で実際に使っている歴史の教科書の全訳を借りてくることにした。借りてきた教科書を読んで、私はまた驚いてしまった。小学生が読む教科書に、日本の侵略行為に関してだけで４０ページも記述してあるのだ。読んでみると、中学３年生である私が全く知らなかった出来事が山ほど書いてあった。日本帝国主義の略称である、「日帝」という初めて聞く表現や、ある農村に侵攻してきた日本軍が、村民全員を教会に呼び出す命令をし、集まってきた人々に銃弾をあびせたという事件。読んでいるだけでも息が詰まりそうだった。日本人の私でさえそうなのだから、朝鮮半島の人々はどんなに恨んでいるだろうか、恨みを忘れるなど無理なことではないか、という思いで一杯になった。それと同時に、私はなぜ今までこの事実を知らなかったのだろうか、知ろうとしなかったのだろうか、と思った。また、なぜちょん先生は日本に来られたのだろうか、という疑問もでてきた。例外的に、親日的な教育を受けたのだろうか。私が逆の立場で、かつて自分の国を侵略した国に行けるだろうか、と考えると、余計ちょん先生の考えを聞きたくなった。

初めて講座に参加してから、１ヶ月ほど後にその機会があった。初めはこんなことを聞くのは失礼なのではないか、とためらって近づいていけなかった。勇気を振り絞って、「日本に来るまで、日本のことを憎んでいましたか。」と聞いてみた。するとちょん先生は、「当たり前。日本に来るまでは、日本人となど口も聞いてやらない、と思っていた。」と答えた。しかし同時に、ちょん先生は「過去の出来事を隠さずに率直に学ぶことが大切だと思う。」とも答えてくれた。このちょん先生の言葉は、やはりショックだった。しかし、これからどうすれば良いのかを考えるヒントをもらった気がする。

私はちょん先生との出会いをきっかけとして、韓国のこと、日本と朝鮮半島との過去の出来事について、もっと知らなければならない、と強く思うようになった。日本に来て、日本人と交流を持ち、韓国の言葉や文化を精力的に紹介しているちょん先生の活動は、日本と韓国の相互理解への種をまいているものだと思う。

私もちょん先生のように、韓国に行き、日本の知られていない様々なすばらしい文化を、韓国の人々に知ってもらいたいと思う。そのために、韓国、そして日本について私自身がもっともっと勉強しなければならない。自分の国や、他の国のことを、より深く学んだり、知ったりするという地道な歩みが、今一番大切なのではないか、と思った。ちょん先生との出会いを通して、今このようなことを考えているところである。